

## 近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史

### 第四章(1) 1937 年日中戦争～昭和天皇の「勇気」

#### 第四章(1)Report & Talk まとめ(2021/3-2021/11)

##### 2021 年

- 3 月 28 日(日) プチ労 120 回 レポーターGO 第四章(1)概説
  - 4 月 25 日(日) プチ労 121 回 レポーターなおこさん
    - 第一節 戦争への「Point of No Return」 a.天皇機関説事件
  - 5 月 30 日(日) プチ労 122 回 レポーターあさみさん
    - 第一節 戦争への「Point of No Return」 b.2.26 事件
  - 6 月 27 日(日) プチ労 123 回 レポーターゆいちゃん
    - 第二節 日中戦争ーアジア太平洋戦争の原因
      - a.天皇制というシステムの戦争と抵抗 ①～③
  - 7 月 25 日(日) プチ労 124 回 レポーターしょうごさん
    - 第二節 日中戦争ーアジア太平洋戦争の原因
      - a.天皇制というシステムの戦争と抵抗 ④
  - 8 月 29 日(日) プチ労 125 回 レポーターGO
    - 第二節 日中戦争ーアジア太平洋戦争の原因
      - a.天皇制というシステムの戦争と抵抗 ⑤(前半)
  - 9 月 26 日(日) プチ労 126 回 レポーターむぎたさん
    - 第二節 日中戦争ーアジア太平洋戦争の原因
      - a.天皇制というシステムの戦争と抵抗 ⑤(後半)
  - 10 月 31 日(日) プチ労 127 回 レポーターゆたかさん
    - 第二節 日中戦争ーアジア太平洋戦争の原因
      - b.日中戦争の性格を浮き彫りにする南京大虐殺 ①②
  - 11 月 28 日(日) プチ労 128 回 レポーターけんいちさん
    - 第二節 日中戦争ーアジア太平洋戦争の原因
      - b.日中戦争の性格を浮き彫りにする南京大虐殺 ③④
- ・・・第四章(1)終了・・・
- ◎12 月 望年会

##### <2021-3-28 プチ労 120 まとめ>

参加者：8 人(SA さん、NE さん初参加) 中高年：青年=4：4 地域：それ以外=4：4

メニュー：キーマカレー、ナスとじゃがいものザブジ

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 30 回

新章：第四章 日中戦争から敗戦(1937 年～1945 年)～昭和天皇の戦争

## (1)1937年 日中戦争～昭和天皇の「勇気」

### レポーターGO 概説

資料：第四章(1)「草稿(暫定版)」@300円(PDF版別途添付)

丁度、新しい章に入るところで、初参加のお二人もいて、みんなそれぞれの歴史をやってきた意味や感想が出て、「草稿」筆者としても、大変励みになりました♪

<前置き：歴史は面白い！？>

**Reporter GO**：教科書に載っているような支配者のではない、民衆の闘いの歴史、はどんなかということで、明治維新あたりからやってきた近現代日本の歴史も、本格的な戦争に突っ込んだ時期に入る。

初参加の人もいるので、あらためて、そもそも何で昔の歴史をやっているか？

歴史でおこったことが終わったことじゃなくて、すごく今につながっているんじゃないかということ。

例えば、ここ数年、あらためて韓国と問題になっている「慰安婦」の問題や、いわゆる「徴用工」の問題は、特に、この本格的な戦争がもたらしたまま、そのまま、どころか、さらに悪化している。

それは、隣の韓国のことだし、在日朝鮮人への差別という問題でも、今の僕たち自身の問題。

そして、そういう今につながる歴史をあまりに僕らは知らないんじゃないか、ということ。

実際、「草稿」はできているけど、これを書いている僕自身が専門家でもなくて、「レポーターの案」にあるように、みんなにレポーターやってもらって、話しながら、みんなの意見ですすめてこられたから、面白かった。

「草稿」を書き始めて、初めて、日本の近現代の歴史って、ほんとに朝鮮の歴史でもあるんだと思ったし、書き続けていて、この年になって、初めて知ったことが多い。

歴史からくる問題は、今の一人一人の責任とはいえないし、知らなくても生きられる。

だけど、知らず知らずに差別していたり、また戦争をおこすのはいやだ。

さらに僕自身っていうことでいうと、日本の社会は、労働者やみんなが、なんだか、生殺しのような楽しくないクソな社会だと高校生あたりから思ってきた気がする。

この社会で自分は何をしたいのか、できるのか、わからないのと裏腹だった。

それをわかるためにも、高校のつまらない授業をみんなでボイコットしたり、大学で地域活動したり、共産党に入ったり、仕事で農村を回ったりしながら、この社会、どうにかできるんじゃないかと思ってきた。日本は良いんじゃないかと。

その分、「国粹主義」というか、外国の人に興味を持たなかった。

高校の日本史の教師が1年間、朝鮮史だけやってくれたが、ひとつも残らなかった。

ロンドンに仕事で5年間いてから、ようやく少し変わった。

外国の人にもいろんな思いと行動があるんだと。

でも、その後、大学の時から「世の中変えるんだ」と言っていた親友が、財政の教師なのに、学生に何を教えるんだと悩んで樽山節考をセミで読んだりして、大学教授になったとたんに自殺したのを止められなかった。

そして、今、日本は、引き続き、フクシマも女性差別も格差もすておいて、五輪も原発も戦争の準備も、とにかく進めようとしている。

隣の韓国に比べても、なんだか窮屈で人と自然に優しくない社会だ。

これは、やはり、年を食った僕なんかの責任だと思うが、どうにかするために、いろんな活動するのと同時に、歴史を知ることなんじゃないかと思った。

それも、自分だけの知識じゃなくて、みんなの意見で。そのほうが面白い。

どうしてこんな社会になってるのか。

それでも、今まで、多くの人たちが、クソな社会をどうしようと闘ってきたか知ることなんじゃないかと。

みんなはどうか？

N：歴史を学ぶことっていうと、「無知は罪」という言葉が身に染みる程、何も知らなかったことを思い知らされる。プチ労で学ぶ歴史は、何故在日の方が日本にいるのか、何故ずっと差別されているのか、満州ってどこにあったのか・・・

何も知らないでも生きられるけど、だから浮薄に人を差別して平気で決めつけられることができてしまうんじゃないか。

もうそんなことはやめたいと思う。だから、今を知るために歴史を学ぶ・・・

MG：大変なので年一回くらいいいが、レポーター廻って来た時が勉強になる。自分が表層的に知っていたり、断片的に知っていることが、つながってうれしい。

AS：「年とると」段々学ぶ機会少なくなるので、楽しい。レポーターとか苦手だが、結構調べものして、受験以来だったし、いろんなことがつながる。SAさんが行ったアイルランドってどこかわからなかったが、連れ合いにIRAのとこだよっていわれてそうかと思ったり。今の日本は、一度失敗したら許さない社会。失敗を避けるためにも学ぶ必要ある。

UY：以前やっていたマルクスより絶対面白い。ほんと「知らないことは罪」。僕は、なんとなく親は中国、兄は朝鮮と思っているが、韓国嫌いっていうの多いし、ほんとに日本がした「ひどいこと」の内容を知らない。一方、最近、アメリカではアジア系住民ヘイトがあるが、中国と日本は一緒くた。日本も自分で思うほど知られていない。

SA：アイルランドでは、よく「ニーハオ」と言われた。日本製品やブランドは知られているが。

MK：何がほんとにあったのか。事実を知っておかないと。学校教育で教えることとそうじゃないことを。その上で、何が正しいか、自分で判断したい。

MG：歴史は人により見方がある。プチ労でやるのが一番民衆に近いものだとすると、教科書というか支配者側の歴史がある。

UY：その仕組みがわかるまで学ばないと。

#### <第四章前書き(「草稿」2～3p)ー知らない戦争>

Reporter GO : 知っているようで知らない戦争の歴史に入る。

2pにあるように、今、敗戦時に10歳以上だった戦争体験世代は20人に一人だし、従軍経験はさらに少ない。そのなかで、被害者としての経験はまだしも、加害者としての戦争は語られていない。

それどころか、1990年代以降、「侵略も虐殺も慰安婦も強制労働もなかった」という動きが強烈に強まっている。

3pにあるように、アベたちの政権の始まる直前、2006年には、世論調査で「侵略や植民地支配の被害への謝罪や補償はまだ十分でない」が51%だったのが、昨年の世論調査では14%に減少した。

そうした意味で「戦後」は決して終わっていない。

第四章の構成としては、(1)第一項で、開始した1937年を中心に、日本の本格的戦争のきっかけである日中戦争にどう突っ込み、副題「昭和天皇の戦争」とあるように、天皇がそれにどうかかわったかを民衆の抵抗や日本による南京大虐殺の実相とともに見る。

(2)第二項では、中国の抗日闘争の側から日中戦争を見る。

日本は、その日中戦争に、アジア太平洋戦争が始まる前に、「民主」を創った中国民衆に敗けていたのではないか。そして、現代では「独裁国家」の本家のように言われる中国の「原点」を我々はよく知らないんじゃないかという問題意識。

ちなみに、(2)までは一応「草稿」原稿を書いたが、以下はまだ構想。

(3)第三項では、アジア太平洋戦争から敗戦までだが、戦争の名称のとおり、アメリカとの戦争というより、中国に敗北した結果としての東南アジアへの侵略だったという切り口。

その側面から、現代でまさに問題であるミャンマー(ビルマ)やベトナム、フィリピンなどの抗日闘争も見ていきたい。

また、日本国内の民衆、その中でも、現代で差別の続く女性たちが、どう戦争に巻き込まれ、なぜ、戦争を支持していったかなどを見ていきたい。

(4)第四項では、戦争の残したものの最たるものとして、一昨年番外編でやった「慰安婦」「徴用工」問題および在日朝鮮人の抵抗をあらためて整理してやりたい。

#### <第四章(1)目次(3p～4p)概説とレポーター案>

Reporter GO :

第一節では、戦争への「Point of No Return(引き返し不能な点)」となった二つの事件を見る。

天皇機関説事件は、「天皇は国家の機関である」という学説を一年近く排撃運動が続き「天皇は神」に引きもどしたというのが通説ながら、敗戦でリセットされたのではなく、大きく残されたことがある。

2.26 事件では、事件の詳細な全貌というより、青年将校の想いとそれがもたらしたものに焦点をあてて見たい。

第二節の a では、前半①～④で、昭和天皇裕仁と首相近衛文麿を二人の主な登場人物として、軍部の独走ではなく、「天皇制というシステム」の支配者層がどう戦争に突っ込んだかを見る。最後に反戦勢力を一網打尽にした人民戦線事件。

a の後半から、民衆の姿。「草稿」の分量としても半分以上。

その前半、a の⑤は、青年たちの人民戦線事件後も続き敗戦後までつながる抵抗の姿。

農村図書館を創った浪江虔は、昨年、MG さんが立石再開発反対運動のレポートをしたセミナーで知り、その仲間たちの労働運動における抵抗の姿をあわせて青年群像として描いてみた。

ここでは敗戦後、浪江虔の運動が公共図書館設立と革新自治体運動につながったことと、仲間の青年たちの運動が広島原爆被爆者運動立ち上げにつながったことまで見る。

第二節の b では、今、なかったことにされようとしている南京大虐殺事件について。

石川達三の小説「生きている兵隊」や兵士の多数の陣中日記に基づいて、その事件と兵士の生態の実相を見たうえで、南京で家族を虐殺された中国人の視点で描いた堀田善衛の小説「時間」なども踏まえて、現代の我々にとっての事件の意味を見る。

#### <2021-4-25 プチ労 121 まとめ>

参加者：7人(NMさん初参加) 中高年：青年=3：4 地域：それ以外=5：2

メニュー：沖縄の闘いに敬意を表して

タコライス&ナスの沖縄黒糖味噌煮

#### 「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 31 回

新章：第四章 日中戦争から敗戦(1937年～1945年)～昭和天皇の戦争

##### (1)1937年 日中戦争～昭和天皇の「勇気」

###### 第一節 戦争への「Point of No Return」 a.天皇機関説事件

レポーターなおこさん

「天皇制というシステムの戦争」は、どうして起こり、今、我々に何を問うのか。

その入り口、「天皇は国家の機関か神か」という 8ヶ月にわたる天皇機関説事件。

この事件を契機に「神がかりの軍国主義が民主主義を潰して戦争に突入」が通説だが、

「それは、当時、盛りあがる民衆のパワーに対して『時代遅れ』になった『明治』以来の天皇制を据えなおそうとした支配層(天皇制というシステム)の間のバトル。

結局、民衆のパワーを恐れ『内乱、革命よりも』と侵略、戦争に向かった。

そして、敗戦後も『機関』と『神』は、両方残った。

日本国憲法の天皇制は、『国家の機関である天皇』にからみついて戦前から続く岸信介などの支配層に『我こそは国家』という民衆を無視する意識を温存し、国民投票もせずに『国民の総意としての象徴』(日本国憲法第一条)として実質的な『神』を残している。

自分自身、天皇制に『無関心』だった。

しかし、勝手に『天皇あつての国民』にされ、その『国民の総意』をかさにきて『我々こそ国家』と思っている『アベたち』などの人々をのさばらせているとしたら、日本国憲法一条こそ、我々の社会にからみついて資本主義の矛盾を隠す、諸悪の根源なのでは？」

そういう渾身のレポート(レジメは最後に添付)で、以下のように天皇制についてのトークが盛んに続いた。

そして、レポーターの感想。

「何かすっきり出口のない天皇制をこれまで考えるのを避けてきた自分なのではないか？」と気づかせてくれたのは、プチ労の若者たちが“日常から天皇制なんか考えてますよ”という感じで、今回、たくさん意見を言ったからだ。奇しくも、天皇が前面に出る第四章に入るこの時、もう一度、いやがらずに天皇制に対峙しようと思わせてくれた。」

同じく、敢えて「無関心」と避けてきたのかもしれない「昭和」育ちの「草稿」筆者も、「フワッとした天皇制」を日常的に見つめる「平成」育ちの人々に問われていると思った。

## TALK

NM：「天皇機関説」を唱えて東大教授辞職に追い込まれた美濃部達吉は「大正デモクラシーのリーダーで民主主義者」じゃなかったのか？

GO：彼も支配層の一員で、「民衆を主人公にする」という意味では民主主義者ではなかった。実際、彼は、明治憲法が否定されることに公然と反対した。

MK：天皇制って、それに(天皇を含む支配層が?)互いに寄りかかりあう「相(?総?)依存のシステム」だと思う。血筋もはっきりしないのに、政府は天皇の地位を守り続ける。

GO：ただ、「天皇の血筋」は、歴史学者網野さんによれば、「万世一系」などではないが、7世紀末からは、1300年にわたって、一応続くモノがあるらしい。

朝鮮や中国もそうではなく世界でも珍しいらしい。

7世紀末に、沖縄も九州南部も東北北部も支配できていない「ヤマト」の王が、中国への文書に、「日本」と「天皇」という言葉を同時に初めて使った。

MG：問題は、「天皇」だけでなく、「日本、日本人」ということも、同時に、7世紀から、「ヤマト」のものでしかなかったということですよね。

GO：そう、あらためて考えさせられたが、「日本」とか「日本人」って何かということ。

ただ、網野さんは、事実、世界でも珍しく続いてきた「日本」＝「天皇」を徹底的に総括しないと「君が代」を強制するような最近の事態を覆せないのではとも言っている。

MG：最近、東京五輪の名誉総裁に天皇がなったことを見て、あーやっぱり「天皇と日本がリアルに結びついている」と思った。

「フワッ」とした天皇を五輪に無謀に突っ込むための「都合」で持ち出す。

天皇というフィクションと国家というフィクションが結びついている。両方のフィクションを疑うべき。

N：戦前と同様に、アベたちの準備している戦争にも、天皇はいつでも利用される。

UY：しかし、NさんもGOさんもそうだったように、自分も実感として天皇について無関心だった。

NM：「天皇」といっても、Passionが湧かない。今は「天皇」より「お金」じゃないのか。閣僚の多くが「日本会議」に加入しているとかはあるが。

MK：実は「日本会議」と天皇は仲が悪い。「フワッ」とした天皇に不満？

実際、平成天皇は、「美しい心を持った平和な日本人」という理想像、フィクションを演じきったとも言える。彼は、「天皇家を何としても維持する」という意味で非常な野心家。

そのためだけに発言する。今の天皇の方が「反原発」とか「軍備反対」とか、口走ってしまいそうで「危ない」。

AS：育ったのは、祝日の度に日の丸を立てるような家だったが、祖父母たちは、昭和から平成に変わった後、天皇に対する態度が変わった。

MG：今、たしかに、問題の根本は「お金」というか、資本主義の問題だが、天皇は、そうしている国家権力の根源。

N：実際、天皇にからみついているアベにしろ、スガにしろ、その感覚は、戦前以来の「我こそは国家」みたいで、我々民衆と全く違う。

NM：一方で、天皇には、「人権」がまったくない。

MK：平民にしたら「危ない」。政府は、平民の「天皇」に大量の票が集まってしまうという危機感を持って、天皇の地位を守る。

MG：「日本国」の憲法第一条「国民の総意として天皇は日本国の象徴」というのは、「正しい」のかもしれない。「天皇」とセットになった「日本国」こそ同時に問わないと。

「日本の天皇」を問うことは、「日本という国家」を問うこと。

それは、「国家などという概念はここ200年のもの。それ以前にはなかった」（森巢博「無境界家族」2000年）とも言われる「国家」に対して、「自分たちで自分たちのことを考え決めて行動する社会」を創ることでもあると思う。

次回5月30日は、あさみさんレポーターで、もうひとつの「戦争への Point of No return」と言われる陸軍青年将校による「大クーデター」2.26事件。

<2021-5-30 プチ労 122 まとめ>

参加者：9人(久しぶりのMHさんとICさん初参加) 中高年：青年=4：5 地域：それ以外=5：4 (今回からMGさん地域以外)

メニュー：「梅雨」入り前に

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 32 回

新章：第四章 日中戦争から敗戦(1937 年～1945 年)～昭和天皇の戦争

(1)1937 年 日中戦争～昭和天皇の「勇気」

第一節 戦争への「Point of No Return」 b.2.26 事件

レポーターあさみさん

日中戦争の前年 1936 年 2 月、陸軍青年将校が率いる 1500 人の歩兵部隊が首都東京の中  
枢機能を占拠し、「近代史上、最も実現可能性が高かったクーデター」といわれる 2.26 事  
件。(青年将校の写真など、後添レポーター作成資料参照)

「青年将校を演じる高倉健主演の映画などを見て『忠臣蔵』のようなロマンを感じてあ  
こがれていた」というレポーターが、あらためて懸命に取り組んだレポートで、ズバット  
まとめてくれた。

「窮乏に苦しむ農村と農民を救うために、恋焦がれる天皇を中心に世の中を変えようと  
立ち上がった青年将校たちだったが、『ゲキオコ(激怒)』した天皇に裏切られて処刑されよ  
うとした時に、ようやく、本当に依拠すべきだった民衆を見ることができた。」

いいかえれば、天皇制の「幻想」を食い破った瞬間でもあった。

**Reporter AS**：娘婿も 2.26 事件の一員だった天皇側近の侍従武官本庄大將は「国を想う彼  
らの気持ちも汲むべきでは？」と天皇裕仁に進言したが、『ゲキオコ』した裕仁は「叛乱・  
逆賊」という見方を変えず、最後に将校たちが「自決するので、それを検死する勅使の派  
遣」を求めても「勝手に自殺しろ！」と言いつつ放った。

そして、その前の海軍将校による 5.15 事件では、裁判が報道され、助命嘆願運動が起  
り、禁固 15 年の判決になったが、今回は、非公開短期間の軍事裁判で処刑された。

首謀者の一人磯部浅一（当時 31 歳）の「獄中日記」には、「・・看守たちがしきりにや  
ってきて声をたてて泣いた、皆さんはえらい、必ず世の中は変わります・・全日本人の“被  
圧階級”はコトゴトク我々の味方だ・・」（「草稿」18p）とあるが、ここで、ようやく、  
彼等にも一緒に闘うはずだった人々を見た。見ることができたのではないか。

彼らの大きな矛盾は、誰に依拠するか。天皇なのか、民衆なのかだった。

本来、天皇が「神」ならば、信仰であるように「神は沈黙」しているはずだった。しか  
し、「天皇制の限界」ともいえるが、裕仁が「ゲキオコ」して、「矛盾」が彼等にも見えて  
きた。

「獄中日記」の別の日の磯部の「天皇への呪詛のような怒り狂った叫び」は、まさに、  
“好きで好きでたまらなかつた女にフラレタ男のウラミ節”であり（「草稿」20p）、処刑の  
際も「天皇陛下万歳」は言わなかった。

一方、「裕仁が、その長い生涯において、この時ほど強く怒りを面にだしたことはない」  
といわれるほど『ゲキオコ』した裕仁は、その後、『目覚めて』、戦争の『大元帥』になっ



ていく。

GO：1970年に陸上自衛隊市谷駐屯地で、「自衛隊立ち上がれ」と『激』を飛ばした後、割腹自殺した小説家三島由紀夫も、「英霊の声」など盛んに2.26事件について書いているが、そのなかで、「天皇は、なつてはならない『人間』に二度なつた。二度目は敗戦で、一度目は2.26事件」と書いている。

N：レポーターは、2.26事件を「かっこいい」ってあこがれてたんだね？

RAS：そう。左翼で言えば、革命歌「インターナショナル」のような、5.15事件の海軍将校三上拓が作つて2.26事件でも歌われた「青年日本の歌」も好きだった。

でも、調べてみると、青年将校以外の下士官や兵士の多くは「軍の命令」だから出動していて、青年将校の想いとあまり結びついていない。逆に、青年将校たちはエリートだった。

N：軍つてそういうところなんだね。今のミャンマー見ている、兵士たちが民衆を撃つのも命令に逆らえないからだと思う。

RAS：兵士や民衆と結びついてないという意味では、青年将校の『教科書』を書いた北一輝の「矛盾」を青年将校たちも吸収していた。

N：北一輝の矛盾？

GO：「国民の天皇」を初めて言い出した北一輝の「国民」の内容は、「常に曖昧だった」と北一輝を詳細に研究した松本清張も言っている。民衆を見据えたものではなかつた。北一輝には、青年将校だけでなく、安田財閥総裁を刺殺した朝日平吾(31歳)や浜口首相を狙撃した佐渡屋留雄(21歳)も期待した。

朝日も佐渡屋も非正規労働者だった。しかし、搾取のない世の中に変えようとしながら彼等にはなかなか仲間がつかれず、天皇に期待した。（「草稿」24p）

N：「楯の会」とかあるが、三島由紀夫も結局仲間をつくれなかつたんじゃないか。

MG：彼にも「居場所」がなくて、天皇にすがつた。

N：「天皇はわかってくれるはず・・・」

MG：石原慎太郎によれば、三島は極端に運動神経が鈍くてコンプレックスがあつたらしい。それで「自信をもとう」とした。

UY：去年は、三島の割腹自殺から50年で、かなり宣伝されている。

MK：しかし、裕仁はかなり「バカ」だつたらしい。

一同：おー！

MK：2.26事件の時も、何が起つたか聞きまくつたが、側近はかなり正しい情報を入れているのに、理解しなかつたらしい。だから、敗戦後、マッカーサーは裕仁と面接して「これは使える」と裕仁の戦争責任を免責して、いいように使うことにした。それを見て育つた明仁は、かなり優秀で、天皇家を維持するためだけだが、野心的に「平和の天皇」を演じきつた。

GO：この後、「バカ」だから利用されたというより、「バカ」なりに戦争の司令官として主体的になつていくということか。

MH：三島も割腹自殺も知らない。2.26事件は知っているが、受験の際の一種の記号。天



<2021-6-27 プチ労 123 まとめ>

参加者：8人 中高年：青年=4：4 地域：それ以外=5：3

メニュー：6月恒例インドネシア風肉味噌丼&タフ・ゴレン(厚揚げとトマトの甘辛炒め)

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 33 回

新章：第四章 日中戦争から敗戦(1937 年～1945 年)～昭和天皇の戦争

(1)1937 年 日中戦争～昭和天皇の「勇気」

第二節 日中戦争－アジア太平洋戦争の原因

a. 天皇制というシステムの戦争と抵抗 ①～③

レポーターゆいちゃん

「草稿」26 頁～38 頁

今回は、日中戦争直前の状況。

「草稿」では、日中戦争は「軍部の『暴走』ではなく、『大人気の天皇制のプリンス』近衛文麿内閣が『国民統合に中国との戦争は“わるくない”』と拡大」としている。

特に、日中戦争開始の一か月前に首相になった立役者近衛について、その『『思想』の矛盾と空疎』を書いたが、レポーターは問いかけた。

「近衛にたいした中身がなかったとしたら、実際に政治に影響を与えていたのはどの勢力だったのか。軍部と財閥？文麿というカモフラージュで国民は眼をくらまされたのか、それともわかかっていても戦争にむかっていったのか」

それには、次回、もう一人の立役者天皇裕仁の言動も含めて「天皇制システム」全体がどうしたかを見る必要があるが、今回は、テンポの良いレポートとともに、「国民」はどうだったのかという臨場感のあるトーク。

それは、東京五輪の中止か開催かがせめぎ合う、まさに今のわれわれ民衆の問題と直結する面白いトークになった。

## Report & Talk

Reporter YY：①には、日中戦争の出発点は「満州事変」とあるが、「満州」って何だったのか？

YS：日本「国民」にとって、ひとつの「夢」にもなった。実際、「満州」では国内でも珍しかった上下水道が整備されて、少なくとも日本人の生活は結構よかったらしい。

GO：敗戦後、1964 年東京五輪で開通した東海道新幹線のモデルとなった豪華な「暁の超特急」も走っていた。国内で 5 反とか零細な農地を耕作し困窮していた小作農民が「満州」では 20 町歩の地主になれた。ただし、それは、中国、朝鮮農民が開拓し強奪した農地だった。

R YY：②では、近衛が首相になる直前の総選挙では「おびただしい棄権率」とあり、今とも似ているが、どういう感じなんだろう？

YS：国内の都会では、「満州事変」以来、軍需もあって、景気がよかった。

返上したが、3年後には、初めての1940年東京五輪が近づいていた。

GO：そのなかで、政党の腐敗、軍部の進出などに対する「嫌気」とともに、主に都会の中間層だが、生活は「高度成長」して、政治への無関心が高まったのか？

たしかに今とも似ている。そういうなかで、近衛が登場。

RYY：そして近衛。③のいろんな描写を見ると、ホント中身がない。

例えば、首相になる4年前の論文「英米本位の平和主義を排する」（「草稿」36頁）、最初は「人道主義」とかいいて良いが、最後は、日本の「生きんがための唯一の道」として「満州への進展」でしかない。

GO：今のアベと似ている。

「家系」が良く「日本を取り戻す」とか「大仰な」ことを言って、排外主義しか中身はなく、近衛より「人気」はないかもだが、案外、10代には人気がある？

MK：麻生にしてもアベにしても、実業の能力はないから政治家にされた。

RYY：コロナを検査しないで「現実をみようとしなさい」ところが似ている。さらに近衛が「ふんわり」した感じで、少しずつ、論理をずらしていくのも似ているかも。

N：こんな奴を「許した」「国民」の方はどうか。今、東京五輪の中止の声が高まっているのにもう一歩止められない。こういう「国」が恥ずかしい。

MK：戦前も今も「国民性」だと思う。

GO：しかし、その「国民性」があるとしても、もともとあるというより、歴史的に創られたものじゃないか。

最近、歴史をやるので調べていると、『日本人』が『お上』の言うことに従って『同調』しやすい『国民性』だということも敗戦後創られた『神話』だという論証もある。

MG：民族学者の宮本常一の「忘れられた日本人」だったか、日本の農村では、長老を中心に全員が納得するまで話し合っ決めて行ったという報告もある。

GO：そう。「日本国」「日本人」「日本語」「日本文化」にしても、18世紀から、日本だけでなく、世界で資本主義の「発展」とともに「近代国家」がつくられるなかで、できたものにしかすぎないというのが、1990年代からの一つの大きな論調になっている。

RYY：そうはいつでも、実感として、日本が「島国」だから、「鎖国」していたから、あるいはそういう「風土」があるから、というのは説得力もある。

N：でも「島国」っていったらイギリスもそう。

MG：ただ、イギリスは、その後ほとんどかく、市民革命、民衆が自分たちの力で王制を倒して共和制を宣言をしたという歴史を持っているからちがう？

RYY：日本では、「楽」だから、自分で考えなくていいから、従ってしまうのか。

YS：だから、最近のテレビでは、毎日のように「東大王クイズ」やっている？

MK：「東大」という権威で煽っているのがメディア。

UY：でも、「日本人」っていう意識を持つ時ないかな。

戦争中、朝鮮の人を日本名に「改名」させた日本はほんとおかしいと思うが、海外旅行して中国人と間違えられると「ムカツ」とした。

GO : 仕事でロンドンに 5 年いて、最初に韓国人と間違えられた時には同じように感じたが、長くいるうちに、外人にもいろいろいるんだなということがわかってきて、自分の「国粹主義」が減って来た。

RYY : 逆に、N さんが「こんな国恥ずかしい」と言ったが、私の周りでも、日本人であることを嫌うというか、自信がないというか、そういう人が結構多い。

敗戦したからか、アメリカ任せだからか、アイデンティティが揺らいでいるというか。だから、「誇り」を持ちたいことになるのか。

プチ労では、割と日本の「悪い」ところをやるわけだが(笑)。

GO : いや、支配者層の「ばかさかげん」も知らない。そのなかでも、どう闘う民衆がいたのか探ろうということで。

N : 逆に「日本」が好きだから。

MG : 1 %の支配者の「悪いところ」。

#### <After comment>

N : 面白かった。「国民性」ってどういうものかっていう議論から、あらためて歴史を学ぶ意味が見えた気がする。

日本の人も歴史のなかで、「長いモノにまかれる」ことと「自分たちで闘う」こととがせめぎあってきたことに、学びながら少しずつ気が付く感じ。

今のオリンピックについても、「同調しやすい」日本の人々が、「言っているんだ」となったら「反対」が 8 割になった。

「同調」が運動に結びついた感じ。

それは、コロナだけでなく、コロナのなかで、オリンピックが、格差とか、この社会のひどさを見せたからだと思う。

今の五輪強行で見えちゃったものは、人々の生活も命も全然考えないこの国の支配層の姿だったんだよね。

そこにみんなの怒りが集中してる。

まだ、「中止」にはならないけど、歴史を学びながら、同時に、「しゃべり場」とか、小さいながら運動をつくっていくことの成果が出ている。

次回 7 月 25 日プチ労 124 回は、日中戦争がどうして始まり、どう拡大させられ、泥沼化したか。もう一人の立役者の天皇裕仁の言動も見る。レポーターしょうごさん。

以上

<2021-7-25 プチ労 124 まとめ>

参加者：8人 中高年：青年=3：5 地域：それ以外=4：4

メニュー：新作！岸田さん差入れカジキマグロ・鱈の南蛮漬け

&三里塚なすとピーマンの甘辛味噌煮

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 33 回

新章：第四章 日中戦争から敗戦(1937 年～1945 年)～昭和天皇の戦争

(1)1937 年 日中戦争～昭和天皇の「勇気」

第二節 日中戦争－アジア太平洋戦争の原因

a. 天皇制というシステムの戦争と抵抗 ④

レポーターしょうごさん

「草稿」39 頁～59 頁

1937 年 7 月 7 日、中国北京郊外の盧溝橋での「つまらぬ衝突」から拡大し泥沼化した日中戦争。

どうして本格的戦争になったのか。

「草稿」では「軍部の先手を打つ」と拡大させた近衛とそれを後押しした天皇裕仁の言動を中心に記述した。

それに対して、レポートは題して「止められない戦争。止まらない五輪」

「戦争は数字のとれるコンテンツ」として煽った当時のメディアの姿を臨場感豊かにレポート。

そして、メディアに煽られた「民衆のメンタリティって今とちがうのだろうか？ 反戦の声はどうだったのだろうか？」と Good Question !

まさに、五輪強行の最中で、今と違うこと・今と同じこと、という良い議論になった。

同時に、「それでも、権力の意志は「人民戦線事件」にも見られるように、反戦の声をどこまでもつぶしたことが印象的。小さな声をどこまでも「圧殺」しないと戦争を続けられなかった。」という感想が出た。

## Report & Talk

Reporter YS：盧溝橋事件を契機に戦争報道は過熱した。

まずラジオ。300 万台を突破して普及が進められた NHK 一局だけ。農漁村で昼間送電線電気契約をするようになり、普及率が都市を上回った。NHK(近衛が総裁)は、その工事費や受信機への奨励金を出し、戦争報道の特別放送に加え、定時ニュースを延長。

新聞は、広告料減少や紙の配給制限で頁数の減少から、戦争報道で経営を維持せざるを得ない状況。多数の特派員を派遣し、戦争捕獲品の展覧会や軍への飛行機献納等の献金運動も盛んに行った。

雑誌は、講談社「キング」(天皇裕仁即位のころに日本で初 100 万部を達成した大衆雑

誌)などが特集号、増刊号と好戦的な紙面を続けた。

戦争ニュース映画も盛んに作られ、一館平均4千人、40館で1日16万人が見に来る規模になった。

戦争が数字のとれるコンテンツと化してしまったために、メディアも戦時協力体制に自ら積極的に加わっていった。

まるで、今の五輪報道に似ている。

GO:ただ、「草稿」に書いたが、民衆はなかなかついてこなかった。作家の武田麟太郎も「中央公論」に「中国人とは国籍など関係なくつきあっている」(「草稿」45p)とまだ開戦2か月のころに書いている。だから、近衛は「国民総動員精神運動」を始めた。

MK:民衆が巻き込まれていくのに2段階あると思う。最初一人だとなかなかだけど「赤信号二人で渡れば怖くない」というように。

N:でも、今は「五輪反対」が根強く頑張っている。

MK:「反対」の人は、テレビを見てないあるいは見ない層が多い。SNSも発信が「一方的」にならざるを得ないが。

YS:当時は、SNSはもちろんテレビもなくラジオだけで、それもNHK1局だけだった。おまけに、NHKはラジオ普及のために受信料免除の策もとった。新聞は朝日が240万部、毎日が340万部で、読売は1937年には80万部だったが翌年には121万部になった。

UY:読売はまだ大阪の地方紙だった。今は読売800万部?

YS:とにかく「中国悪い」の報道が段々浸透していった。今の五輪でいえば「東スポ」がいかにもあからさまに売ればいいというスタンスで似ている。

N:今は海外の報道があるね。

YS:それも、国内のマスメディアはあまり報道しない。

MK:やはり、今もみんなが現場に行かなければ、政府などはコントロールできる。

YY:職場のこどもたちのなかで、ちょっとだけやったデモのニュースをたまたま見て「反対の人がいるんだね」と言っていた。

YS:当時の過熱した報道は「100人切りの勇士」などと、冷静に考えればありえない報道を繰り返した。

日清戦争、日露戦争、第一次大戦と、当時、それまで戦争で負けたことのない日本の民衆のメンタリティは今と違うのか?

反戦の声はどうだったのか?

みなさんどう思いますか?

MK:「非国民」という言葉があったんだから反戦の人たちはいたと思う。

GO:共産党は日中戦争開始の2年前には組織的に壊滅させられていたが、いわゆる合法左派といわれる勢力や在日朝鮮人たちが反戦行動を続けていた。

MG：それでも、一般に伝える「発信の文化」がなかった？

GO：いや、まだ、この時期には、今の「週刊金曜日」にあたる京都人民戦線の雑誌「週刊土曜日」が発行され近衛を批判したり(「草稿」35p)、雑誌「改造」で社会主義者の山川菊枝が生活への影響を批判したり、マルクス主義の哲学者戸坂潤が「ファシズム批判」を发表或してしていた(「草稿」48P)。

YS：ただ、「週刊土曜日」で言えば発行部数は6千部で、主に読んでいたのは学生、知識人だった。

N：誰かが声をあげていけば学生・知識人以外にも反戦のひとたちはいただろう。

GO：宗教者や教師たちもそうだった。

YS：しかし、アジア太平洋戦争になってからと違って、まだ徴兵検査で一番上の甲種合格しか徴兵せずに、兵隊に行きたい人も滅多にいけない状況だった。

GO：たしかに、国内で1937年は、都市中心に「高度成長中」でもあり、戦争が遠かった。

それでも、支配層は、南京陥落でも戦争を終わりに出来ないで「反戦の人たち」を恐れて、日本中が「南京陥落勝利！」の提灯行列で沸き返っているのと同時に、「人民戦線事件」と称して、反戦のおそれのある人たちをゴッソリ一網打尽に検挙した。

「草稿」表紙の写真(新聞号外記事)のように「新装共産党検挙」としたが、実際には共産党再建に関係ある人はほとんどいなかった。

GO：あと、「草稿」から補足すると、日中戦争の拡大と泥沼化はけっして「軍部の独走」ではなかった。

「軍部に先手を打つ」として戦争を拡大し收拾できなくなった近衛、2.26事件で見たように「勇気」を持ってしまって、近衛を後押しした天皇裕仁がいた。

裕仁は、敗戦後、戦争責任はないことを言うために「軍部の責任」を持ち出したが、南京陥落直後、「この戦争は無用の戦争」と参謀本部が涙ながらに和平を主張したことを黙殺した。

## After Comment

AS：日中戦争の「ニ」の字も知らなかった。戦争と言えば「太平洋戦争」。

(\*それは「草稿」筆者も「草稿」書くまで同じだった。)

レポートは具体的で臨場感があった。衝撃的だったのは、すでに1万人は戦死者が出ているのに、みんなノンビリしている感じなこと。緊張感がなく「戦争感」がない。今もし戦争が始まってそんな感じなんだろうか。コロナの受け止めとも似ている。

レポートされたように、当時、徴兵が甲種合格までで、「限られた優秀な人が立派に頑張っている」感じ？ やっとラジオが昼間聞けるようになった農村では、彼らの「武勇伝」を集まって聞くのが「娯楽」でもあったのだろうか。

N：今との違いと今と同じところ、それが考えられていい議論だったし面白かった。



当時はメディアも限られるなかで一方的な情報が流されたが、今は SNS で自分なりに採ろうと思えば情報が採れる。しかし、マスコミの在り方は同じ、当時よりひどいかも。

そのなかで、MK さんの言ったように、政府にコントロールされないためにも、実際、現場に行ってみないとわからない。

また、AS さん言うように、当時は、情報に飢えていたのかも。でも情報が氾濫する今も同じで、SNS などの武器を我々のものとしてもっとちゃんと使わなきゃ。実際、この間、そうした武器の使いようでいくつも五輪の闇を明らかにしてつぶしてきた。

もうひとつは、「反対の人」はどうだったのかの議論。

たしかにインテリ中心で、その声は小さく、みんなへの伸ばし方が難しかった。そして、世の中は「戦争に遠かった」

それでも、権力の意志は「人民戦線事件」にも見られるように、その声をどこまでもつぶしたことが印象的。

小さな声をどこまでも「圧殺」しないと戦争を続けられなかった。

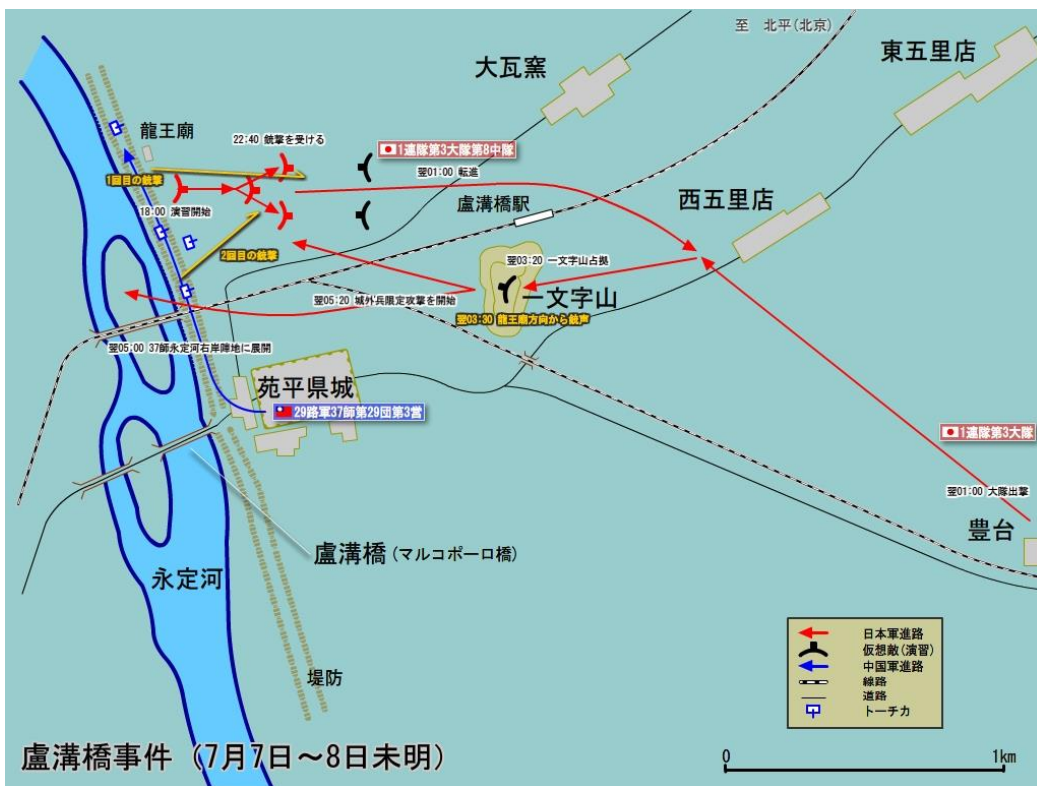
次回 8 月 29 日プチ労 125 回は、そうした日中戦争下でも見ておくべき民衆の抵抗。

「人民戦線事件」で一網打尽にされたが、そのなかでも人民戦線の実践を続け、敗戦後の「民主主義」の実質をつかみ取ることにもつながった「名もなき青年たち」の青春群像の前半。

<レポーターレジメ>

プチ労 (2021年7月25日) 止められない戦争。止まらない五輪。

### 1. 盧溝橋事件



盧溝橋事件地図<sup>1</sup>



兵力配置図

<https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/6/67/%E7%9B%A7%E6%BA%9D%E6%A9%8B%E4%BB%98%E8%BF%91.jpg>

7月7日に衝突があり、9日から停戦交渉の合意、11日には現地では停戦の協定成立  
11日閣議 陸軍大臣 3個師団動員案

盧溝橋事件時	インパール作戦		
連隊長 牟田口廉也	第15軍司令	牟田口廉也	
旅団長 河辺正三	ビルマ方面軍司令官	河辺正三	

## 2. 拡大か不拡大か

### 陸軍

拡大派 杉山陸軍大臣、梅津次官、参謀本部武藤作戦課長

中国軍が弱いので、数個師団で北支から内蒙を抑えることができると考えた。

不拡大派 石原莞爾、河辺虎四郎

満州国の建国中で対ソ軍備を優先すべきと考えた。

### 海軍

不拡大、外交交渉を優先しつつ、交渉が頓挫した場合は中国全域での戦闘

海軍の場合は上海や中国沿岸部が戦域となるため。

## 3. 盧溝橋事件を契機に加熱する報道

### ラジオ

1937年5月 300万台突破

同年9月 324万台

同年10月 329万台

拡大の背景には、農村漁村部の人々が昼間送電線に電気契約をするようになり、日本放送協会が電灯線送電会社に工事費や受信機への奨励金やラジオ受信機の値段（30円→20円）が下がったことで普及がした。

盧溝橋事件の4日後に通信社の幹部を招き、居力を求めた。

また、内務省警保局「時局ニ関スル記事取扱ニ関スル件」と題する通牒を行った。

### 新聞

1937年当時は新聞は広告料の減少、ページ数の減少から戦争に関してセンセーショナルな報道をする事で、経営を維持せざるを得ない上京であった。

### 特派員の派遣

朝日新聞 51名の派遣 東京日日新聞、大阪毎日も朝日新聞と同規模の派遣 読売は

## 13名の派遣

### 新聞社のイベント

鹵獲品の展覧会 慰問使の派遣 軍への献金運動 軍歌の懸賞募集 海外への使節の派遣

### 雑誌

戦争特集号と増刊号の出版

講談社では野間清治が担当者を読んで叱責するほど好戦的な紙面であった。

### 映画

ニュース映画

1館1日平均観客4000人、40を超える映画館 1日16万人が見に来る規模であった。戦争が数字の取れるコンテンツと化してしまったために、マスコミも戦時協力体制に自ら積極的に加わっていった。

### <2021-8-29 プチ労 125 まとめ>

参加者：7人 中高年：青年=3：4 地域：それ以外=4：3

メニュー：新作！ガンボ・ライス&焼ポテト

ガンボは、オクラ(アフリカ原産・別名ガンボ。黒人奴隷貿易とともにアメリカへ)とチキン・トマトのスパイシー煮込みーアメリカルイジアナ(ニューオリンズ)のケイジャン(アメリカに移植したフランス人)料理。好評完食につき、プチ労定番メニューに採用♪

### 「近現代日本 150年の労働者・民衆の闘いの歴史」第35回

新章：第四章 日中戦争から敗戦(1937年～1945年)～昭和天皇の戦争

(1)1937年 日中戦争～昭和天皇の「勇気」

第二節 日中戦争ーアジア太平洋戦争の原因

a. 天皇制というシステムの戦争と抵抗

⑤：農村図書館の浪江虔と「京浜労働者グループ」(前半)レポーターGO

「草稿」60頁～88頁

前回、近衛文麿、昭和天皇裕仁たち「天皇制システム」が日中戦争を泥沼化させ、民衆の抵抗を恐れて「人民戦線事件」として、「著名な」反戦勢力を一網打尽にしたことを見た。

しかし、その後、戦時下で、より具体的な「人民戦線」の実践、「たみとともに」抵抗を続けた「名もなき青年たち」がいた。

「草稿」筆者が、「浪江虔」を初めて知ったのも、2年前、Mgくんの立石再開発反対運

動に関連したセミナーで、いわゆる「歴史教科書」にはでてこない青年たちである。

概要は以下のとおりだが、沢山の青年たちの「青春群像」を描こうとして「草稿」は数十ページになった。

そのために、うまく説明できたかはわからないので、添付した年表も参考にして、あらためて、是非「草稿」をご一読願いたい。

## Report (概要)

学生から農民運動に入ったが挫折した浪江(旧姓板谷)度は、人民戦線事件を経てアジア太平洋戦争が始まる前に、東京南多摩地区に全国で初めての農村図書館をつくった。

治安維持法の弾圧のもとでも、彼は、助産師になった妻とともに、農村図書館を多くの図書館のように戦時下の「思想善導(国家体制の思想を注入する思想統制政策)」の装置とせず、農民が自分で学び考えられる場にしようとした。

敗戦後は、治安維持法下での「転向の闇」を乗り越えて、農村図書館の構想を広げた農民自身による「部落文庫」から「地域文庫運動」の発展に尽力する。

それは、公共図書館設立運動に発展し、住民の自治意識の砦として、いわゆる「革新自治体」を生み出す運動につながる。

同時に、この時期、度らに関連する多くの青年たちが、京浜地区で軍需産業の中心である重化学大企業工場の労働運動の現場で「人民戦線」の実践と抵抗を模索し、仲間の輪を広げ続けていた。

その模索と仲間の輪は、「京浜労働者グループ事件(第一期：上海東亜同文書院一派、第二期：福島磐城炭鉱争議首謀者山代吉宗一派)」という治安維持法による検挙で断ち切られる。

しかし、これらの青年たちも、「転向」せずに獄死した仲間の想いを引き継いで、敗戦後「革命期」の労働運動、農民運動を担い、その後の反戦運動、原水禁運動以前の原爆被爆者運動を立ち上げる。

今回は、前半として、その敗戦前の部分。

後半、敗戦後の部分は、次回9月26日プチ労126回、レポーターむぎたさん。

## Talk

UY：「第二期京浜労働者グループ：吉宗一派」の吉宗さんの妻の山代巴さんが、今でも韓国で同じという劣悪な労働環境の旭硝子工場で、「星座の本」をみんなで作って回し読むところから、女工たちの仲間の輪を広げたということだが、農民のために同様の童話などたくさんつくった宮沢賢治の場合は、「教える」という上から目線というか、孤立していた気がする。

GO：青年たちの想いや工夫の焦点も、戦時下でかつ搾取され、ひどい目にあっても「カタツムリ」のように閉じて黙っている人たちがどう「綻び」て、一緒に闘う仲間になってい

くかだった。

N：治安維持法で検挙されて、「ヒットラーは偉大だ」とまで妻への私信に書いて「転向」した浪江虔に対して、山代巴は「仲間を売らないことが第一」として苦勞して「偽装転向証明書」を書き上げたという。

虔には「守るべき仲間」がいなくて孤独だったのか。

現代でも、アベが「現代の治安維持法」といわれる共謀罪を強行成立させたほかに、アジア太平洋戦争直前に、治安維持法で「転向」しても期限なく拘留し続けるためにつくられた「予防拘禁法」と同じものを池田小学校事件を契機にコイズミが精神病者に対してつくった(2002年「心神喪失者等医療観察法」)。

今でも、仲間をつくり、守ることが問われている。

AS：精神病者も期限なく拘留できるんですか？

N：当局の勝手な裁量で YES！

## After comment

N：みんなからの拍手でわかったようにさすが草稿の筆者だけあって、練られたレポートだった。

戦争が開始されようとするこの時期に共産党が壊滅されんとするこの時期に、人々とともに立ち上がろうとした若者たちがいたことが生き生きと語られたと思う。次回それが敗戦後どう引き継がれていったか、が楽しみになった。

以上

<2021-9-26 プチ労 126 まとめ>

参加者：7人 中高年：青年=3：4 地域：それ以外=4：3

メニュー：久しぶり！チャナ豆・キーマカレー&大根サラダ 完食！

「近現代日本 150 年の労働者・民衆の闘いの歴史」第 36 回

新章：第四章 日中戦争から敗戦(1937 年～1945 年)～昭和天皇の戦争

(1)1937 年 日中戦争～昭和天皇の「勇気」

レポーターむぎたさん

第二節 日中戦争ーアジア太平洋戦争の原因

a. 天皇制というシステムの戦争と抵抗 ⑤

農村図書館の浪江虔と「京浜労働者グループ」(後半)

「名もなき青年たちの抵抗」の後半、敗戦後編。

浪江虔は、農村図書館を開いたものの「完全転向」した挫折があったが、敗戦後、彼が期待した農民自身の「部落文庫」が生まれた。

そして彼自身が「民衆のことば」で「農民にわかる」本づくりに邁進する中で、「地域文庫」運動が全国的に花開き、1960-70年代、公共図書館建設から住民「自治」の運動に発展した。

一方、「人民戦線の実践」に邁進した山代巴は、多くの仲間を失い戦争を止められなかった挫折を越えて、敗戦後、戦争に従軍し虐殺した広島の人たちの「三つの根性(抜け駆け・見てくれ・あきらめ)=ギギ風」とそれを支えた女たちの「忍従」をはねのけることを自らの生涯の課題とし、「根性」と「忍従」を「抑圧された者の自己防衛」として小説に執拗に優しく描き出した。

そして、広島の人々の多くは、1950年代前半に、被ばく者自身が「自分の言葉」で語ってもらうことを通じて、その後の原水禁運動の「礎石」となる原爆被爆者運動、すなわち被ばく者の「自治」を立ち上げていった。

度と巴に関する本を図書館で借りまくってまとめたレポートは、彼らの実践を生き生きと伝えながら圧巻だった。

題名は「地べたからの自治と革命～挫折と忍従を超えて～」(後添付参照)

そして出した論点みっつ。

論点 1. 『民衆のことば』と『アカデミックなことば』

- ・1950年、度と巴の対話「民衆のことばを語れ」
- ・コロナ禍にはびこる「専門家」の言葉
- ・有権者に響かないエリート「リベラル派」の「正しい言葉」

論点 2. 『ギギ風』『三つの根性』を乗り越える。

- ・南多摩農村図書館の一室で巴が書いた『いたどりの茂るまで』
- ・抑圧されたものの自己防衛。今、コロナ禍の相互監視社会に吹くギギ風。
- ・ギギ風を乗り越える「地を這い生きる人々」の尊厳の解放。

論点 3. 『自治』と『革命』

- ・革命は革命によって崩される？本当の革命とは。
- ・自治を実践する「人」と「場」を残していくことの大切さ

## Report & Talk

UY：農村図書館をつくっただけで何だろうと思ったけど、すごいね。「自治」なんだね。

Reporter Mg：そう。浪江度も「治安維持を最優先する国家が軽視または無視するに決まっている勤労大衆の生活と文化の分野で活動を積み重ねていく道を選んだ」と言っているが、力対力でなく、スキマで地道に。高円寺の「素人の乱」もコミュニティをつくろうとしている。それを作家の雨宮処凛も「革命後の社会を先につくるもの」と言っていた。

生存、自然、文化、表現といった「民衆が自治を実践できる土台づくり」に度は力を注いだ。

GO：山代巴たちも被ばく者自身が「語る」ことを地道に引き出していった。

ほんと、原水禁運動の前に、その前提としてこういう運動の積み上げがあった。

今、福島で、保養交流運動でやっているのも、「自ら語る」ことだと思う。

**Mg**：巴の短編『いたどりの茂るまで』を読んだがすごい。

踏みつけられた農民のなかに生命の輝きがある。そして、民衆は権力とたえず騙し合いをする。コロナ禍の相互監視社会も「ギギ風」だが、そのなかで立石でも「ヤミ営業」をたくましくしているところもある。その辺に「ギギ風」を乗り越えるカギがある。

そういう「地べたの人々の抑圧を解き放つことば」をしっかりと聞き取ることが必要。

「原爆に生きて一原爆被害者の手記」をやっと出した時に、巴が序文に「我々はまだ、彼らにとって、真実を訴えられるほどの資格がないのです」と書いたが、それでも、忍従を強いられた人々の言葉を「弱いまま」記録し、伝えた巴たちの「この一歩」は、被爆者に喜びと自信を与え、運動の礎となった。

**N**：民衆が自ら語る、「民衆のことば」という点で、中野重治が民衆のためにつくったという「文芸学校」は今どう？

**MK**：たしかに「文芸学校」は、「字を書けない人に文学を」ということで始まった。今、自分が講師をしているクラスでは女性が増えた。わりと男性は「小説家になりたい」という「承認」の欲求で来ている人が多いが、女性は、コロナ禍のなかで、自分って何か見つめたい、自分について何か残したいと言う人が多い。

**N**：自分も「自分史」を書こうかなと最近思う。途中まで書いたが、あらためてプチ労でやっている全体の歴史のなかで自分史がどうなのか考えながら書くのはどうかなと。

**GO**：先ごろ亡くなった民衆史の色川大吉によれば、敗戦後、1970年代まで、全国各地で民衆が自主的に「自分で語り書く」運動が続いた。

そして、彼は「民衆が真に自分たちの社会の主人公になるためには、新たな質を獲得しなければならぬ。その第一は自己を表現する力」（『ある昭和史—自分史の試み』「ある常民の記録」1975年）と言っているが、今はどうだろう？

ネットで知りたい情報は知れるし、SNSで「発信」もできる。あらためて「自分で書く」なんてダサイ？

**N**：扱い方しただが、自由に情報を扱える時代ではある。

**As**：わりとTwみているが、ネトウヨなど「ワカラナイ人のカンジ」を掴むにはいい。

**Mg**：でも、Twでは「言えた感じ」がしない。やはり、小さくても今日のようにじっくり話せた方がいい。

**YS**：いってみれば、Twは「うんこNOW!」を伝えられるだけ。そういう情報交換でしかない。そのなかで「言葉の力」が弱まってきている。

**MK**：「カリスマ美容師」という言葉が出て、さらに「神対応」とかいう言葉が出てきた時点で終わっている。それ以上の表現がなくなってしまった。

**Mg**：「神」が「八百万の神」に広がっていくならいいかも。

**GO**：逆にここから自分の言葉を取り戻していくということか。

**Mg**：実際、今は、「言葉」だけでなく、アートや音楽や多様に表現する「ことば」を持っている人も増えている。

**GO**：たしかに、プチ労関連では、HK(@バルセロナ)とHDが絵や写真や詩で「No



name」という小さな冊子をつくらうとしていた。また、3.11以降、反原発デモの度に、MC(@ベルリン)やSKがデモコールを懸命に創っていったのも「民衆のことば」を紡ぐことだと思ふ。

## After Comment

N：二人の実践、ほんとにすごいと思った。

ただ、レポーターのあげた今の「素人の乱」は、権力の弾圧を受けない程度にコミュニティをつくっている感じもする。メキシコのサパティスタは「自治区」をずっと維持しているが、権力はたえず弾圧の機会を伺い、そのためにサパティスタは武装もしている。

「自治」は権力に打撃を与えないとだめじゃないか。

一方、巴が生涯の課題とした「女が侵略を支え、女も差別者」だから「女の忍従をはねのけて家の中を人権の砦にする」はそのとおりだと思う。

「フェミニズム」って女がえらそうに言い立てるだけって感じもするが、その意味でなら、今こそ、そうだと思う。

AS：地域文庫という「自治」コミュニティは現代でもしっかりと根付いていて、私の住むところにもあって資金面で苦慮しながらもミニコミ誌を出したり活動している様子。

たみとやのりんたろう書房図書館(無料・貸出期間自由)だってそう。

Nさんのいうように権力に打撃を、というほどのコミュニティ形成は難しい現実があるかもしれないが、そういった仲間が集まり発信していく場が点在しているということは「言葉」と「ことば」の重み、価値をまだ信じている人がたくさんいるということ。

現代に蔓延るギギ風が、巴の時代と同じく抑圧された人々の自己防衛だとするならば、民衆同士が攻撃し合う遣る瀬無い怒りと憎しみのパワーを権力に向けることが必ず可能なはずで、いまではネットでも政権批判・皇室批判の嵐が吹いている。

文字だけでなく直接的な言葉の力がもっと大きく強いものになればすごいことを起こせるんじゃないか。

GO：以前、プチ労で言った「縦(権力への対抗)と横(民衆の自治)」が、いい意味で“もみ合う”ことかもしれない。

一方、「草稿」で「国家が軽視または無視するに決まっている(?)勤労大衆の生活と文化の分野」に？マークを付けたのは、権力は必要ならどこまでも入って来ると思ったから。その意味で、この後の「アジア太平洋戦争」の項で、「総力戦」のなかで、権力がどこまで民衆の生活と文化を蹂躪したかも見てみたい。

同じく、「総力戦」のなかで不可欠な女性の戦争への「協力」がどうなされたか、それが、女性が求めた「民主」をどう逆手に取ったものだったかを見たい。

次回10月31日プチ労127回は、ゆたかさんレポーターで、今、そうした女性差別も含めて、アベたちが「なかったことにしたい」日本軍の南京大虐殺の前半。

<レポート>

プチ労その 126 「敗戦後の『地域文庫』運動と原爆被爆者運動」 レポート  
地べたからの自治と革命 ～挫折と忍従を越えて～

1940 年 5 月 11 日 山代吉宗・巴・加藤四海・板谷敬 検挙。

同日、加藤「転落死」

5 月 13 日 浪江虔 第二回検挙 → 「転向」

1943 年 8 月 山代巴「偽装転向」

1945 年 1 月 14 日 山代吉宗 獄死

2 月 16 日 板谷敬 獄死

## 一、浪江虔の地域文庫運動

○本を介したコミュニティーづくり

1944 年 2 月 1 日 浪江虔、満期釈放

11 月 23 日 南多摩農村図書館再開

「治安維持を最優先する国家権力に正面から衝突して挫折した苦い経験を踏まえて、こういう国家が軽視または無視するに決まっている勤労大衆の生活と文化のいくつかの分野で、長期的展望のもとに活動を積み重ねていく道を選んだ」

1945 年 10 月 15 日 初の「部落文庫」誕生

「農村図書館の建設とは本を持ち込んだり建物を作ったりすることではない。部落に、本を読んで向上しようという『読み仲間』が結集することなのだ」

→「本を回す」ことを通じて人が繋がる。

○「薦めたい本づくり」－ 知識の総有化

1947 年 12 月 農山漁村文化協会(農文協)理事に

1950 年 9 月 「誰にもわかる肥料の知識」出版

1953 年 10 月 「村の政治」出版

= 「薦めたい本づくり」「『民衆の言葉』による本づくり」

→知識という武器を人々に配る。知識を「占有」から「総有」へ。

そして「闘える」から一歩進んで「自治を実践する」農民・村民づくりへ。

★農文協は、安藤昌益全集や、最近では宮本常一の講演集、内山節著作集を出版 するなど、民衆知を総有化する取り組みを続けている。

★「村の政治」の実践運動として、主婦たちが町の予算書を猛勉強して町政改革に成果を上げた国立。後に生活者ネット初代事務局長の主婦・上原公子が多数の市民の 主体的支持に押されて市長を 2 期務め、景観権裁判や住基ネット切断など国家・資本との闘いを続け

た。

○自治の土台・地域文庫～地域を図書館の網の目で覆う～

1962年3月 地域文庫第1号「あかね台文庫」開設

1964年 町田市内の地域文庫 20 に到達。

1970年 親子読書・地域文庫全国連絡会発足

1972年 移動図書館「そよかぜ号」3号車巡回開始

1980年代 「町田市立図書館をよりよくする会」発足・図書館協議会設置運動

→自治労・職員組合・市民が連携し、議論を重ねながら図書館を作っていた。

「文庫ができれば必ず子どもが押しかけてくる。とても本が調達できないということで自治体に体当たりする。体当たりしていくうちに主権者としての自覚が育ってくる。」

方針ありき、期限ありきの浮ついた「革命論」でなく、「いつか民衆が自治を実践できる土台づくり」に度は力を注いだ。今地域に生きる一人一人に、そして未来を生きる子どもたちに、革命を託した

## 二、山代巴と原爆被爆者運動

○浮ついた「党再建」と「農民運動」への違和感

1945年8月1日 山代巴、病気仮出所

10月、党再建本部に呼び出されて上京し、吉宗らの死を知らされる。

この時、先輩の九津見房子と一晩語り明かす。

『占領下の(議会を通じた)平和革命』などと言って性急な組織化を急ぐよりも、『10年の無党時代』を招いた原因を真剣に反省し、職場や地域に根付く努力をすべきではないのか

しかしこの会話が告げ口され、質問も提案も認められないまま、翌朝巴は謹慎を命じられる。平党員のくせに「自分で考えて行動」し、「不謹慎に幹部のやったことを批判する」巴は、ここでも「ギギ風」にさらされる。

一方、

1946年9月 農広島県連常任書記就任

1947年2月 農全国大会で唯一の女性中央委員・婦人部長に選出

しかしここでも、小規模自作・自小作農中心の広島で「小作農の耕作権確立・地主制解体」「共同耕作」という日農の方針に違和感を覚える。

○忍従をはねのける！山代巴と被爆者運動

1946 年 1 月 中井正一との出会い

→侵略を支えた、民衆が互いを蹴落とし合う「三つの根性」「ギギ風」を克服するには、「女たちが忍従をはねのける取り組み」が重要だと説かれる。

「中井先生の指摘されたことに生涯かけようと思いました」

2 月 小学校の教室で、わずか 20 名の「広島青年文化連盟」発足会。

→・GHQ に言論を封じられても、体験を書いたり物証をとっておいたり、「誰にでもできるそういうことから始めよう」という学生。

・綴り方教育を通じ、被爆体験を書ける児童を育て始めていた教師

「あの会場には怒りと勇気と希望だけが寄り添っていたように思えます」

1949 年 6 月 日鋼広島争議

朝鮮人部落の多数の在日朝鮮人とともに、広島青年文化連盟の巴や峠 三吉、丸木俊らもそれぞれの方法で支援活動を行う。

10 月 平和擁護広島大会

青年文化連盟、日鋼争議団、そして多数の朝鮮人女性たちが参加し、峠 三吉が急遽起草した「原爆廃棄」宣言を採択。

1952 年 9 月「詩集 原子雲の下より」出版

1953 年 6 月「原爆に生きて 原爆被害者の手記」出版

「我々はまだ、彼らにとって、真実を訴えられるほどの資格がないのです」

「たったこれだけのことがなぜ本名で書けないのか。自由な国の人には理解できないことでしょう」それでも、忍従を強いられた人々の言葉を「弱いまま」記録し、伝えた巴たちの「この 一歩」は、被爆者に喜びと自信を与え、運動の礎となった。

---

論点 1. 『民衆のことば』と『アカデミックなことば』

- ・1950 年、虔と巴の対話
- ・コロナ禍にはびこる「専門家」の言葉
- ・有権者に響かないエリート「リベラル派」の「正しい言葉」

論点 2. 『ギギ風』『三つの根性』を乗り越える。

- ・南多摩農村図書館の一室で巴が書いた『いたどりの茂るまで』
- ・抑圧されたものの自己防衛。今、コロナ禍の相互監視社会に吹くギギ風。
- ・ギギ風を乗り越える「地を這い生きる人々」の尊厳の解放。

論点 3. 『自治』と『革命』

- ・革命は革命によって崩される？本当の革命とは。
- ・自治を実践する「人」と「場」を残していくことの大切さ

以上



## Report & Talk

Reporter が、上海から南京へ進軍する日程に従って描かれた「生きている兵隊」の最後、南京大虐殺が一段落した後と思われる頃に南京市内の酒場で飲む兵士たちの姿を描き、当時、全面伏字とされた第 11 節を全文朗読。

南京への途上で、中国人女性を殺害した一等兵が、夜の暗い窓にいた白い猫を恐れ、持ち込んでいた拳銃で、酒場の日本人女性に発砲し負傷させてしまう場面。

GO : 背景を補足すると、この一等兵の部隊のモデル、第 16 師団は、1937 年 7 月、中国北京周辺の偶発事件で日中戦争が始まった当初、予備役中心に急きょ編成された増援部隊のひとつ。

現地では停戦協定ができたのに、近衛らがわざわざ日本、朝鮮から送り戦闘を拡大させた。

そして、戦争が上海に飛び火し、中国の抵抗が激しいので、11 月になって、北京周辺から引き続き上海戦の応援に送られた。

兵士たちは、そろそろ帰国できると思っていたのに戦闘を強いられた。

地図の 16D という赤い線がこの師団の上海上陸後の行程で、地図にも「作戦制令線(この線を越えて戦闘はしないという限界線)」があるように、上海を制圧したら終わりのはずが、上海南側から上陸した増援部隊との間で、さらに、南京攻略を競わされた。

それを命令した司令部は、正規の軍隊のように、規律を取り締まる憲兵部隊も、食糧を補給したり、死者を後送する兵站部隊も持たない急増の「仮の軍隊」だった。



Reporter UY : 「白い猫」を恐れて、兵士が、これまでをいろいろ思い出して何か神経衰弱のようなことになっている。激しい戦闘が続いている間は「忘我の境地」というか感じな

いことが、一段落すると襲ってくる。

GO：兵站部隊がないので、激しい戦闘が続き死者が増えても、その遺骨を生き残った兵士が抱えて進軍した。だから、次の戦闘で「この死んだ仲間の仇だ」と中国人を虐殺することにもなった。

UY：それにしても、途中には、現地女性の虐殺場面が何度もでてくるのに、最後のこのあたりだけ全面的に伏字にされたのはどうしてだろう？

Mg：相手が、中国人ではなく日本人の女性だったからじゃないか。

UY：石川達三は、発禁処分とともに、起訴され有罪になったが、その可能性があるのに、出版したのは、戦場の人間の心理に作家魂が刺激されたのだろうか？

GO：石川自身「発禁にされ起訴されるとは思わなかった」と言っている。それに対して「南京事件の惨虐も聞いただろう石川は、衝撃を受けたが、それがなぜか、その疑いを、日本とその軍隊そのものに向けず、兵士個人々人に向けた」（子安宣邦「日中戦争と文学という証言」）という評価がある。

UY：このころは、作家などみんなそうだったのかな？

AS：「生きている兵隊」の後だと思うが、出版された火野葦平の「麦と兵隊」、それに続く「兵隊3部作」は読んだ。それは、兵隊の成長物語だと思うが、火野は、暗い「生きている兵隊」を読んで対照的なものを書いたのかな？

GO：そう、石川の判決の数か月後、次項で取り上げようと思うが、中国本土での日本軍兵士の行軍の美しさを描いた火野葦平の「麦と兵隊」が大ベストセラーになった。

読んだかどうかはわからないが、火野は、石川が取材した時点で、上海で現役の兵士だったから、兵士の側に寄り添ってその苦労や成長を描いたのかも。

アガニスタンで頑張った中村哲さんの叔父でもある火野は、それで国民的人気作家になったが、敗戦後10年経って自死した。

UY：ところで、この小説に、医科大学卒の一等兵が、医学生としては人の命を救うことが使命だったが、「戦場では、敵の命をごみ屑のように軽蔑すると同時に、我とわが命をも全く軽蔑する気になっていく」とあるが、こんな戦争が始まったら、ホントにどうするんだろうか。

昔、地方公務員の友人が「上から言われたらやるよ」と言ったが、自分は徴兵されても、人を打つよとは言えない。

Mg：徴兵拒否した時の罰則と言うか扱いによる？

GO：難しいが、次の次の項、「アジア太平洋戦争」のところで紹介したいが、調べてみると、日本でも徴兵拒否の記録が残るのが数人いた。キリスト教集団「灯台社」。

アメリカでは、約12万人の日系人が収容所に入れられたが、そのなかで、苦渋の末に、アメリカへの絶対的忠誠と徴兵を拒否した青年たちが数百人いた。

二つを拒否したという意味で「No No Boy：ノーノーボーイ」と呼ばれた。

YS：ドイツでは、良心的拒否というか、徴兵を拒否する場合に代わりに社会貢献しろという制度になっている。

N：やはり戦争が始まる前に止めなきゃということだが、何で、日本では、「慰安婦」「徴用工」とともに、アベたちは南京虐殺を消したいんだろう？

Mg：国際的に問題にされているからじゃないか。

YY：世界で常識なのに、日本のなかでは、まじめに考えない。

N：沖縄では、沖縄戦の時の大量に埋まったままの遺骨を発掘し続けている人たちがいる。そういう人やそういう具体的な証拠がある時に「なかった」なんていえない。

YY：「南京」は、やはり、相手が中国だからか。相手がアメリカだったらそうはいかない。

N：中国への対抗意識、差別感？ そういう意味では、韓国のボーカルグループ **BTS** が好きなので韓国語を勉強していた「こども塾」の小学生に、韓国と日本との歴史を話したら、「メンドー」だなんていう感じで、**BTS** もうまい英語の方がいいかと言い出した。

Mg：みんなに「もめることはいや」っていう感じがある。

N：本日は総選挙投票日だが、「5時たみ」に来ている中学生は「選挙権もらったら行かないかな？」と言う。

MK：オーストリアは、棄権すると罰金がある。

YS：ベルギーは、何回か行かないと剥奪される。

GO：ならせたくない候補からマイナスする反対投票権もつくりたい。

Mg：そうそう。

N：学校で普段から政治について考えさせないんだから、中学生の気持ちもわかる。

YY：ほんと、平和教育っていっても、「みんな死んじゃったんです」みたいで中身がない。

#### After Comment :

N：南京大虐殺を何で隠したいか、あらためてわかった気がする。

日中戦争に戦略もなく「そうなっちゃったんだよね」と言う感じ。

そのなかで、兵士は、「ふざけんな」とすさんで、いらだち、それを消すために女を殺した。その「グダグダ」な感じが、まさに「日中戦争の性格を浮き彫りにした南京大虐殺」であり、総選挙をよそに同じ日に起こった「京王線事件」の犯人も同様じゃないか。

「自分の意見を言う。それをプラカードに書いてみんなで見せる」というようなことを学校でやらないなら、少しずつでも「5時たみ」とかでやりたい。

AS：自分自身、戦争といえば「太平洋戦争」で、日中戦争ってあまり知らず、修学旅行で、沖縄と広島に行って「戦争でこんなに“被害”を受けんだ」という感じで、YYちゃんも言ったように、そういう教育が多いから、「加害」について、ほんとに知らない。

次回 11月28日プチ労 128回は、けんいちさんレポーターで本稿最終回、南京大虐殺の



後半。「5時たみ」の高校生女子も参加するかもです！

12月は、勉強無しで、年末恒例「望年会」を12月19日日曜日午後5時からやりたいと思います。

以上

<2021-11-28 プチ労 128 まとめ>

参加者：8人(5時たみ常連高3女子 Myさんとアーティスト SHさん初参加) 中・高・年：青年=3:5 地域：それ以外=5:3

メニュー：ハンガリー・グーヤッシュ(ハンガリー農民料理。牛筋とじゃがいものワイン・パプリカ煮込み)&インド・バスマティ米

「近現代日本 150年の労働者・民衆の闘いの歴史」第38回  
第四章 日中戦争から敗戦(1937年～1945年)～昭和天皇の戦争  
(1)1937年 日中戦争～昭和天皇の「勇気」(最終回)

レポーターけんいちさん

第二節 日中戦争ーアジア太平洋戦争の原因

b.日中戦争の性格を浮き彫りにする南京大虐殺 ③④

今回は、アベ(前々首相)やスカ(前首相)やカワムラ(名古屋市長)やハシシタ(元大阪市長)などが「なかった」ことにしたい南京大虐殺の後半。

1937年12月13日の日本の南京占領から数日間にわたる南京市内における大虐殺本番に関する兵士の証言の一部(「草稿」)を読み合わせた上で、レポーターのわかりやすい提起を踏まえて、南京事件の現代での「意味」をトークできた。

そのなかで、「草稿」筆者としても、初参加の高校生の「授業では『こういうことがあった、おわり』という感じで何か疑問があったが、自分が、何が疑問だったのかを『発見』した。もっと知って自分の考えを持ちたい」という発言は感動だった。

## Report & Talk

Reporter MK：(2015年、「戦争法」を強行採決した直後の「戦後70年首相談話」を)アベは「戦争には何ら関わりのない私たちの子や孫、その先の世代の子供たちに謝罪を続ける宿命を負わせてはならない」(「草稿」134頁)と結んだ。

そのとおりといえばそのとおり。

今まで放置してきたために、「謝罪」の段階は終わった。

当事者が存在しないために不可能。

個人的にも最近、長年一緒だった猫が最近死んで、「してやらなかったことを謝りたい」と思ったが、死んでしまったのでできない。

できることはひとつ。

あった事実を踏まえて関係が続けながら、二度と同じことをしないこと。

しかし、今の日本は、戦争に向き合うそういう構造自体を破綻させようとしている。  
放置して事態がどんどん悪くなっていることをわかっていない。

SH: 「忘却」によりなしくずしに許される？ 西欧がものすごく収奪した南米もそう。

しかし、国家は、倫理感という個人の謝罪とは異なって国益が優先する。

N: そうはいつでも、死んだ父は「満州」に動員されてシベリア抑留されたが生き残り帰国し結婚して私がいる。一方、南京事件で虐殺された中国の人たちの子孫はいない。

侵略したり、うまいことやった者の子孫が私たち。

MG: 形式であったとしても「国家」が続くなら、謝罪することも含めて、我々、加害者側の国民として責任がある。

SH: 逆に「愛国心」って何か？ 最近、野球の大谷の活躍ではなんだか嬉しい。

その一方、中国でチベット虐待があるとひどいと思う。

MK: 中国のチベットもウイグルも、日本の南京もダメ。人類の問題。

戦争と虐殺はセットでずっと続いている。今もエチオピアで虐殺が続いている。

どうするのかということだが、まず、南京について科学的調査をするべき。

UY: そう、今なら間に合う。

N: 1923年の朝鮮人虐殺、1945年沖縄戦の民間人虐殺、個人が調査を続けている。

ドイツは国家として調査をした。

SH: ドイツには意思があったが、日本は責任取らない空気。

市民のリテラシーが低いというか。

N: コロナ禍では、市民というより、国家の無責任がよりはっきりした。

GO: ところで、高校まであまり教えられなかったかもしれないが、Myさんは南京大虐殺どう思うか？

My: なんかあったということだけ。南京事件に限らず、歴史のことって「こういうことがありました。おわり」っていう感じで、いつもどうということなのかな？とか何か疑問を持ったまま終わっていたので、今日、自分が、何が疑問だったのか「発見」した。

そもそも、授業で「どう思う？」と聞かれない。

だから、自分の意見や考えをいうことができない。

GO: 「発見」ってすごい！ プチ労やっててよかったー😓

N: ほんと歴史の授業は受験のための年号を覚えさせるだけだね。

GO: 南京事件は1937年だが、作家の辺見庸は、事件に関わった父親からのインタビューを基に「1937(イクミナ)」という本を書いている。

一方、僕自身は、父親が死ぬまで戦争について問いかけることをしなかった。

N: 父は酒乱だったが、戦争の体験を自分で消化できなかったんじゃないかと思う。

MK: 日本は国家として「消化」をやらせなかった。

GO: 調査も含めて、それをどうさせるかという時に、まずは、僕は、よく知らなかった自分をもっと知って、それを知らせていくことかと思うが、中学生とか「何の関係があるの

か。そんないやなことは知りたくない」っていうのもあると思う。

N：若い人は、敗戦後の困窮したなかで小さな妹を餓死させた兄を描いた野坂昭如のアニメ「火垂るの墓」も見たくないというアンケート結果もある。

MG：今日、僕も「草稿」の虐殺の場面を朗読してちょっといやになる感じもあった。

My：・・・私は知っていきたいと思う。(ウルウル😓by 筆者)

N：南京事件に続いて「慰安婦」という組織的なレイプもあった。

これは、今の伊藤詩織さんの事件にも全然反省なく続いている。

SH：「愛国心」の裏返し、「他者がいない」っていう意識は、日本に強くて、固有の問題なのか。最近、外国人が増えて、それが問われてはいるが。

GO：アベたちは絶対認めないが、すでに日本は移民大国。

入管法の問題が今の焦点。

MK：「他者がいない」意識を助長するのが、例えば映画「三丁目の夕日」。

ビートたけしなど「あれはまったくウソ！」と言っている。

AS：「三丁目の夕日」の原作は好きで愛読していたが、映画とまったく違って、人々の日常をほんとにリアルに描いていた。

GO：同感！

N：「草稿」141頁から、作家堀田善衛が、中国人を主人公にして南京事件を描いた「時間」という小説の「レイプされた女子大生が、まさにレイプされたその場所から、受けた傷を癒しながら、自殺を凶った自分を乗り越えていこうとする」様子が引用されている。

そのことと、前回見た石川達三の小説「生きている兵隊」で描かれていた南京事件の日本軍兵士たちが「敵の命を軽蔑するなかで自分の命を大切にする力を失っていった」こととの対比が、今回、最も心に残った。

UY：前回朗読したが、「壊れた日本兵」に虐殺された中国人は本当に悲惨だ。

MG：同じ「時間」から、「死者の数値化による事件の過小評価」ということが引用されているが、ほんとに、亡くなった個人を、ひとりひとりを記憶すべき。

「何万人ではなく、一人ひとりが死んだのだ。」

祖父は、敗戦直前に秋田の花岡で強制連行され抗議した中国人労働者が何百人も虐殺された花岡事件で亡くなった人一人の名前を陶板に刻んだ。

すぐ「何で日本人が悪いのだ。みんなやっている」なんて言われるのは、そういうことを積み上げないからじゃないか。

GO：堀田善衛は「時間」の最後で、レイプされた中国人女子大生のように「自分自身と闘うことのなかからしか敵との闘いの厳しい必然性は見出されない。それが抵抗の原理原則だ。」と書いているが、その「抵抗の原理は、自身との闘いを放棄した加害者にこそ求められる」ということを「草稿」のまとめとした。

そして、次回以降、日中戦争を中国民衆の側から見ることで、彼女の闘うエネルギーが、どうやって生まれてきたのかということも見ていけたらと思う。

## After Comment

UY : 「虐殺の歴史」など、自分は、10代の時には、とても知りたくなかったが、初参加高  
校生の「もっと知って自分の考えを持ちたい」という発言はほんと衝撃だった。

AS : 形だけの「謝罪」や「賠償」ということ以前に、「みとめる」こと、それだけで、す  
ごく違うものなるのではないか。以前、聞いたこととして「右翼」の人たちが、よく、「中  
国もウイグルで、韓国もベトナム戦争でひどいことをした」と言っていたが、それは負の  
連鎖だ。

次回プチ労 129 回(2022 年 1 月 30 日)以降、今年やってきた日中戦争を「他者の目線」  
というか、中国民衆の抗日闘争の側から、資料も少ないながらあったので見て行きたい。

以上